
頭上緑化

辰野さとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

頭上緑化

【Nコード】

N1116T

【作者名】

辰野さとる

【あらすじ】

地球温暖化が進行し、最後の小島に追い詰められた人類。

世界を元の姿に戻すため、彼らは大規模な緑化事業をはじめめる。

地球温暖化はもはや取り返しのできないところまで進行していた。海面は上昇し地球上には小島が一つだけ残された。

わずかに残った数百人の人類は、温暖化の原因物質とされた二酸化炭素を減らすため、大規模な緑化活動をはじめた。

緑化は順調に進み、最後の小島はほとんど森に覆われたが、やはりそれだけでは面積が足りなかった。

そこで、人々は海底から文明の遺物を集め、小島の上に巨大なプラントー施設を建設した。

海上にも膨大な面積のプラントーが作られ、ついには大気中の二酸化炭素濃度を若干減少させるまでに至った。

さらに、想像を絶するような面積の森は大量の水を吸い上げ、数十年が経つ頃には海面水位も下降傾向を見せ始めていた。

「こここのところ、ようやく緑化の成果が出てきたようだな」
男は二十年の間、地球の緑化事業を統括してきた。

彼が事業を始めた頃には数年で水没すると言われていた島が、今では面積を広げ始めている。

「これもひとえに統括の努力の成果でしょう。あなたは人類の救世主です」

助手に持ち上げられるのも悪い気はしない。

男はこの仕事にやりがいを感じていたし、これまで人類を守ってきたという誇りも持っていた。

「新たなプラントーの建設はどうなっている？」

「そのことなのですが……」

助手がすまなさそうに言葉を濁す。

「調査船団の報告によりますと、ついに海底の資材が底をついたとのことです。発掘を見込んでいた資材が手に入らなくなったため、残念ながらプラントーの建設は断念せざるをえないのです」

「そうか……いつか尽きるとは思っていたが、早かったな。これからどうしたものか……」

もはや緑化できる場所は全て緑化が完了していた。

島内はもちろん、住居代わりに係留された船の側面に至るまで、彼らの世界に緑化されていないものなど存在しなかった。

しかし、そこにはただ一つだけ盲点が存在した。

「そうだ。君、頭に鉢植えを載せたまえ」

「なんですって」

「もはや資材も土地も尽きたが、私たちの身体はまだ緑化していない。もう、ここぐらいしか残されていないのだよ」

助手は統括の正気を疑ったが、相手は人類の救世主。反抗など考えもしなかった。

全島で直ちに頭上緑化運動が始められた。

人々は自らの身体、もっぱら頭の上に植物を載せるようになった。

みなが不自由な生活を余儀なくされたが、これまでの功績がある統括の言葉に誰もが従った。

二酸化炭素濃度は順調に減っていったが、やはり人々の緑化だけでは限界があった。

「もうこれ以上の緑化は望めません。しかし、我々はよくやったのではないでしょうか」

助手はこれまでの成果に満足していたが、統括は違った。

「いや、まだだ。ここに、研究所に命じて作らせた新薬がある。これは我々の体質を変容させ、二酸化炭素と水を取り入れるだけで生活できるようにする薬剤だ」

「それは素晴らしい！　すぐ全島へ配布しましょう！」

小さな島に全人類を抱えているため、食糧問題は常に付きまとっていた。

しかし、この発明によってその問題も解決され、再び二酸化炭素は減少した。

ただ、それにも限界は来る。

「もう十分でしょう」

「いや、まだ削れる部分はある。我々は動くたびに二酸化炭素を排出するが、その場に立ち止まっていればその排出を抑えられる。背に腹は変えられない。人類の発展のため、島民には極力活動を控えるように達してくれ」

そうして、島の人々はあまり動かなくなった。そもそも、動く必要はすでに薄れていたのだ。

それから千年が経ち、一万年が経ち、ようやく地球は過去の雄大な陸地を取り戻した。

『世紀の大発見です。ある種の植物に、二足歩行をしていた痕跡が発見されました。これは生物学の常識を覆すものであり……』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1116t/>

頭上緑化

2011年10月9日03時26分発行